早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　21号―1　二〇一三年九月

岡本綺堂『番町皿屋敷』論

―武者小路実篤『二つの心』を視座として―

坂下智昭

一　はじめに

一九一六（大正五）年二月、東京本郷座において岡本綺堂の新作『番町皿屋敷』が上演された。これは書き下ろし作品で、初演後の同年一二月に平和出版社発行の単行本『両国の秋』に初めて収められた。初演は綺堂との提携で定評の二代目市川左團次一派で、これも左團次のために書き下ろされた。左團次は、この『番町皿屋敷』を得意演目とし、二代目左團次死後もさまざまな俳優によって演じられ、現在でも繰り返し上演されている。綺堂が書いた戯曲の中でも『修禅寺物語』、『鳥辺山心中』と並び、屈指の再演回数を誇り、綺堂の代表作の一つといえる。

『番町皿屋敷』は、その外題名が示すとおり、著名な怪談の一つである皿屋敷伝説を材料とする。皿屋敷伝説と一口に言っても、全国各地にさまざまなバリエーションが存在するため、大まかにでも皿屋敷伝説がいかなるものかをまず確認したい。

伊藤篤は『日本の皿屋敷伝説』（海鳥社、二〇〇二）で、江戸期の皿屋敷伝説に関わる著作を総合すると、その基本形は次のようになるとした。

一、一人の奉公人が、主人の秘蔵する一揃いの皿の一枚を過ってこわす。あるいは、その娘に妬みを持つ何者かに皿を隠される。

二、娘は皿の責任を問われて責め殺されるか、あるいは自ら命を絶つ。夜になると、娘の亡霊が現れて皿を数える。

三、犠牲になった娘の祟りによって、主人の家にいろいろの禍いが起こり、衰亡していく。

これを皿屋敷伝説の基本形とするなら、綺堂は『番町皿屋敷』でこの基本形を踏襲しながらも大胆に書き換えたことがわかる。主人公の青山播磨と腰元のお菊は、身分の差こそあれ相思相愛の仲である。お菊は播磨の思いを試すため故意に皿を割り、播磨は疑われたことに怒りお菊を手討ちにする。殺されるお菊は怨念を宿すことなく、幽霊と

して現れることもない。つまり、綺堂は皿屋敷伝説を怪談でなく、純恋愛悲劇に仕立てた。しかしながら、皿屋敷伝説は多様なパターンがあって、何をもって綺堂の創作であると断じるかは、さらに詳細に皿屋敷伝説と『番町皿屋敷』との繋がりを見ていく必要があるだろう。

これまでに『番町皿屋敷』の内容について、その類似性が指摘された説話に彦根の長久寺に伝わる皿屋敷譚がある。[1] しかし岡本経一は、『岡本綺堂読物選集』第二巻（青蛙房、一九六九）の「あとがき」で、「その説話がこの「番町皿屋敷」そのままであった」としながらも、「主従のあいだに起こった恋愛悲劇という着想は、全くの創意工夫である」と断言する。なぜなら、長久寺の説話に酷似しながら綺堂はそれに全く言及していないからだ。そればかりか、一九三三（昭和八）年一二月の『道頓堀』に掲載された「番町皿屋敷」で、恋愛悲劇として扱ったことについて「勿論その全部が私の空想であること云ふまでも無い」と言い切る。つまり、長久寺の説話との類似性は指摘できるものの、綺堂が参考にしたと断定するには根拠に乏しい。

本論では、このあとに触れるように越智治雄の言及があるのみの『番町皿屋敷』と皿屋敷伝説の関わりや、綺堂が何を参考として執筆したかを改めて明らかにしていく。また、その過程で浮かび上がった武者小路実篤の戯曲『二つの心』との関連についても言及する。

二　『番町皿屋敷』と皿屋敷譚

綺堂は初演時に、執筆にあたって怪談の皿屋敷を材料としたことを前提に、皿屋敷伝説について自らが知るところを語る。

一体、私は麹町、加之（しかも）番町の近所に多年住んでゐるので小児の時分から番町皿屋敷といふ名は頭に沁みてゐました。其の事蹟は能く判りませんが、江戸砂子などにも『皿屋敷は牛込御門の内。むかし物語に云ふ、下女誤つて皿一枚を井に落す、其科によりて殺害せられぬ。怨念彼の井に止まり、毎夜その女の声にて一つより九つまでを数へ、十を云はで泣叫ぶ、声ありて形無し。よつて皿屋敷と云ひ伝ふ。云々。』とあるのを見ると、余ほど古くから云ひ伝へられてゐるものと思はれます。新編江戸誌（ママ）にも同じやうなことが記されて、其の場所に番町ではない、麹町三軒屋（隼町）だと説明してゐます。

（「『皿屋敷』のこと」『演藝画報』一九一六・三）

そして、「皿屋敷は江戸の番町ばかりでなく、播州にも此の伝説があつて加之お菊虫など、云ふ御景物までが附いてゐます」とし、仙台、雲州松江、熊本の皿屋敷を紹介し、「支那にも同じやうな伝説があるのを見ますと、この伝説の出所は支那かも知れません」と述べている。

綺堂が材料としたものについて、岡本経一は先に挙げた『岡本綺堂読物選集』第二巻の「あとがき」で、「明治三十二年六月発行の風俗画報増刊「新撰東京名所図会」麹町の部に、番町の旧事として番町皿

屋敷の説話を載せている」とし、「番町皿屋敷もこれにヒントを得たに違いない」と言及する。

皿屋敷の事柄が記載されているのは、一八九九（明治三二）年六月二五日発行の『風俗画報』臨時増刊「新撰東京名所図会　第十九編」である。その中の「番町皿屋敷」の項には、綺堂が言及した『江戸砂子』、『新編江戸志』の内容がほぼそのまま載せられ、播州の「おきく虫」の記述や、皿屋敷伝説が番町や播州のみならず、雲州松江や熊本にあることも記されている。これらから岡本経一が指摘するように、この記事を綺堂が参考としたことは間違いない。では一体これらの情報が戯曲『番町皿屋敷』にどのように活用されたのか。

例えば、綺堂の『番町皿屋敷』で主人公の名は青山播磨だが、これも『風俗画報』の記事を参考にした可能性がある。皿屋敷伝説に登場する主人の名は、青山鉄山、青山将監、青山大膳などがある。その中で播磨の名が見られるのは、同記事中にある『堤醒紀談』で、主人は「小幡播磨」とされている。この中で、「播磨」の名前は、播州から播磨が連想されたもので、播州皿屋敷の名残かもしれないと説明されている。綺堂が「播磨」を用いたのは、番町皿屋敷の由来が播州にあると考えていたからかもしれない。

皿屋敷譚で最も重要な場面は、なんと言ってもお菊の皿数えであろう。『番町皿屋敷』での皿数えは、怪談話とは大きく違う。播磨は、皿一枚が惜しくてお菊を手討ちにするのではないと、お菊に残りの皿を数えさせて割ってみせる。播磨のように、お菊が割った皿以外の残りを割ってしまう話と似たものが『風俗画報』にも紹介されている。『積翠閑話』にある「重宝の皿」という項の記述である。これは、中村経年（戯作者の松亭金水）によって一八五八（安政五）年に書かれたもので、『日本随筆大成　第二期10』（吉川弘文堂、一九七四）の「解題」によれば、婦女子の教誨として著述されたために教訓譚としての側面が強い。

『積翠閑話』では、冒頭で「江戸番町の辺にや。何某といふ人の家」に重宝の皿があって、「侍女の菊」が過ってそれを割り、定めによって主人に殺されて井戸に沈められたと、皿屋敷伝説を説明する。これを「陶器を以て人に易ふる残酷の仕方ならずや」として次のような話を続ける。上野（こうずけ）の国に士人があって、その家に重宝の皿二〇枚がある。あるとき婢女が過ってその一枚を割ってしまう。それを聞いた同じく屋敷に雇われている米春男（こめつきおとこ）は、杵で残りの一九枚を全て割ってしまう。米春男は、「この皿一枚を破る時は。かならずその人の命を断とは。道理にあたらぬ残酷ならずや。元この皿は陶器なり。年を多く経る間には。みな盡く破れつべし。その度毎に人命を断に至らは二十人の命を失ふ歎くに余りあることならずや。吾今一人して二十枚を一回にこぼちやぶるといへども。わが一人の命に過ぎず」と説く。それを聞いた主人は、米春男の道理に感心し、男を武士に取り立てたと結ぶ。

ここで米春男は、皿を割れば命を奪うという不合理さを説く。この皿屋敷譚に共通する不合理さと、『番町皿屋敷』の播磨が残りの皿を打ち割って、一枚の皿のためにお菊を殺すわけではないと示すこと

は、合理性を問題とする点で同じといえる。『積翠閑話』の逸話は、皿を割った侍女が死なねばならない、皿屋敷譚が持つ不合理性を強く意識させ、播磨の皿割りは、封建的な不合理さから逸脱した問題意識を明示する。綺堂が怪談から恋愛悲劇に書き換えるにあたり、その不合理さゆえに幽霊となって現れるお菊の死に方に、封建時代の慣習を超えた近代に通じる合理性を求めたことは想像に難くない。

しかし、綺堂が『風俗画報』の記事からのみ着想を得たとは言い切れない。皿屋敷伝説は古くから歌舞伎や浄瑠璃で演じられ、広く人口に膾炙した物語であり、皿屋敷を扱う文献も数多い。その中で、越智治雄は「皿屋敷の末流」（『文学』一九六八・九）で「文化年中に筆録されたとみられる」、巷説を集めた『久夢日記』と綺堂の『番町皿屋敷』との関連を指摘する。越智が着目したのは、『番町皿屋敷』で青山播磨が水野十郎左衛門率いる白柄組に所属しており、幡随院長兵衛の逸話が作品に組み込まれている点である。越智は『久夢日記』に、すでに皿屋敷譚と幡随院長兵衛の逸話の融合がみられるとし、「綺堂の「番町皿屋敷」の第一場で作者が設定した播磨のシチュエイションにも類想がすでにあったと考えてよい」と指摘した。(3)

『久夢日記』では、前半部が皿屋敷譚にあたる。一六八一（天和元）年三月、場所は牛込の大久保彦六屋敷、彦六は下女の藤に執心するも、藤には辰五郎という夫があり、彦六の意に従わない。彦六は恋が叶わぬ腹いせに、屋敷にある十枚揃いの南京皿一枚を隠し、藤にその皿を詮議するといって、終日終夜、繰り返し皿を数えさせる。そのうちに彦六が居眠りをすると、藤は「一つ二つ三つ」と数えながら、屋敷の井戸へ飛び込んで死んでしまう。その後、井戸を埋め立てるが、夜毎、井戸のあった場所から「一つ二つ三つ九つ、一枚たらぬあらかなしや」と泣き声がする。驚いた彦六の妻子や家来は三日も経たないうちに屋敷から逃げ、彦六ひとりが残った。困った彦六が懇意の水野十郎左衛門に相談すると、水野は彦六を自分の屋敷へ引き取る。しかし、それから一日二日経った時、彦六は身を震わせて、藤に取り憑かれたように皿数えを延々と繰り返すようになり、最期には狂い死にする。(4)

越智治雄が指摘するように、主人にあたる大久保彦六は水野十郎左衛門と関係の深い旗本奴であり、『番町皿屋敷』の青山播磨も、水野十郎左衛門を頭目とする旗本奴の集団、白柄組に属する。この播磨の設定は、綺堂が播磨とお菊を相思相愛の仲に設定したことと並んで、恋愛悲劇たる『番町皿屋敷』の根幹を支える要素である。

『番町皿屋敷』は「明暦の初年」と時代設定がなされ、天下泰平の世で、武士としての存在意義を見出せず鬱屈した思いを抱える青山播磨の境遇が大きな意味を持つことになる。戦もなく、町奴との喧嘩で鬱憤を晴らす播磨にとっての生きる意味は、お菊への恋に他ならない。第二場で、播磨がお菊に向かい「白柄組の附合にも吉原へは一度も足踏みせず、丹前風呂でも女子の杯は手に取らず。仇同士の町奴と三日喧嘩せぬ法もあれ、一夜でもそちの傍を離れまいと、堅い義理を守つてゐるのが、嘘や偽りでなることか」と語る。すなわち、播磨にとって恋が最も大切だった。その恋を疑われ、ついにはお菊を斬るこ

とで表れる播磨の恋に対する執念は、こうした境遇なくしては語れない。つまり、播磨が白柄組の一員であることは、播磨の鬱屈した状態を表す恰好の設定であり、物語を恋愛悲劇へと導く重要な要素といえる。

三　キーワードとしての「旗本奴」

この設定を綺堂が、『久夢日記』によったのかは定かではないが、越智治雄がいうように綺堂自らが編み出したとは言い切れないだろう。『久夢日記』のように、主人が旗本奴という設定は、『久夢日記』の後、一七五八（宝暦八）年に馬場文耕が書いた『皿屋舗辨疑録』も同様である。『久夢日記』では牛込の皿屋敷譚だったが、『皿屋舗辨疑録』では番町の出来事とされる。また、人物名は「青山主膳」と「菊」とされ、皿屋敷譚での標準的な名称になっている。

主膳は、旗本奴の「大小の神祇組」に属する。補足すると、本来、水野十郎左衛門は大小神祇組の頭目とされ、綺堂が使う「白柄組」は、それとは別の旗本奴集団とするものもあれば、大小神祇組の俗称が白柄組であるともされる。綺堂は幡随院長兵衛と水野十郎左衛門の逸話をその後二度にわたり戯曲化した。一九二七（昭和二）年六月に歌舞伎座初演の『水野十郎左衛門』と、一九三五年五月、六月、一一月に東京劇場初演の三部作『幡随長兵衛』である。『水野十郎左衛門』でも水野は「白柄の大刀をたづさへ」た「白柄組」の頭目と表記される。[5] だが『幡随長兵衛』の第三部では、「水野十郎左衛門、三十三歳、五千石の旗本にて神祇組の頭領」とされ、同じ旗本の坂部三十郎の台詞には「神祇組を解散すれば、そのほかの白柄組、六法組なども、自然に崩れてしまふに決つてゐる」とある。[6] ここでは綺堂が白柄組と神祇組を別集団として扱い、作品によってその設定が揺れている。幡随院長兵衛の逸話を歌舞伎に仕組んだ代表的作品、河竹黙阿弥の『極付幡随長兵衛』（一八八一年、東京春木座初演）で、水野は白柄組とされているため、『番町皿屋敷』はこれに倣ったのかも知れない。

『皿屋舗辨疑録』に話しを戻す。『皿屋舗辨疑録』でも皿屋敷譚と旗本奴が関連づけられているが、幡随院長兵衛と水野十郎左衛門の逸話が直接語られることはなく、二人が登場することもない。この中で青山主膳は、「不仁不義なる人」、「極重悪人」と徹底的に悪人として描かれ、その「殺伐の心」を強調するために、「公儀の威勢を借りて町人百姓を苛め、是れを己れの楽み」とする旗本奴の一人と位置づける。[7] 人物の性質を表すキーワードとして、「旗本奴」が活用されたことをみると、『皿屋舗辨疑録』と綺堂の『番町皿屋敷』の手法は近似する。『番町皿屋敷』も、水野十郎左衛門は名前が出されるのみである。「旗本奴」は、播磨の荒れた日常、幕切れで生きる意味を見失い町奴との喧嘩へ駆け出す精神構造の裏付けとして機能している。つまり、皿屋敷譚と長兵衛の逸話の融合は、物語への組み込み方の点で、越智が指摘する『久夢日記』よりも、『皿屋舗辨疑録』に類似性を見出すことができる。綺堂が参考とした先述の『風俗画報』には、「皿屋敷辨疑といふ書」と書名のみだが触れられており、綺堂がその存在

を知らなかったとは考えにくい。加えて、同記事中に『久夢日記』が取り上げられた箇所はない。

綺堂は先に挙げた「『皿屋敷』のこと」で播磨について、「これから先は何うなるでせうかそれは観客の想像に任せたいと思ひます」という。自暴自棄のうえに水野率いる白柄組であるから、皿屋敷の基本形に則った、その後の青山家の衰亡に疑いの余地はない。のちに『番町皿屋敷』は、一九一八（大正七）年に新潮社から出版された『修禅寺物語』で小説化され、ここで綺堂はこの戯曲の続き、つまり播磨のその後を描いた。その後の播磨は、喧嘩に明け暮れて荒れた生活を送る。播磨の屋敷もお菊の幽霊が出ると町の噂になる。そのうち、水野が長兵衛をだまし討ちに殺害すると、町奴の逆襲が始まり白柄組が襲われる事件が起こる。それが幕府の知るところとなり、水野は切腹を命じられ、白柄組は消滅する。そして伯母の眞弓が播磨のもとにやってきて、「白柄組のかしらと頼む水野殿が亡びた以上、お身たちとても安穏では済むまい。何かのお咎めのないうちに、いっそ見事に腹を切りゃれ」[8]と進言する。播磨は伯母の言葉に従い、その夜に切腹の準備をしていると、井戸から青い炎が燃え上がり、お菊の幽霊が現れる。お菊の清らかな顔を見て、「お菊のたましいは自分を怨んでいない。こう思うと、播磨は俄かに力強く」なり、切腹する。

小説版では、お菊の幽霊が登場するが、言葉を発することもなく、ただ播磨のことを見つめる。播磨に見えるお菊の幽霊は、播磨を苦しませる存在ではない。播磨の最期は、あくまでも白柄組に所属した武士の分別といえ、白柄組に所属する者としての予定調和の終わりを迎える。しかし戯曲の幕切れですでに、「一生の恋を失うて……」、それ以外の何ものにも生きる価値を見出せない「あたら男一匹」のその後は、身を滅ぼしていくほかないのである。

綺堂は「『皿屋敷』のこと」で、皿屋敷伝説をどう作り替えたかったかを述べる。

> 何うかして殺す方にも殺される方にも相当の理屈があつて、何方にも同情を惹き得るやうに書いて見たいと思ひ立つたのが、この脚本を書く最初の動機でした。で先づ何かの面倒を避ける為に、主人の青山播磨と召仕のお菊とを得心づくの恋に陥して置きました。

皿屋敷譚を書き換える上で綺堂が掲げた眼目は、殺す側と殺される側の「理屈」であった。これは、『風俗画報』で取り上げられた『積翠閑話』が、皿と人の命を引き換えることを問題とする意識と共通する点である。米春男が主張した皿屋敷譚の不合理さを、綺堂は恋愛関係の男女の理屈にすり替えたと解釈できる。

そのために綺堂は、播磨とお菊を「得心づくの恋に陥し」た。そして登場人物を恋愛に生き恋愛に死ぬような、恋愛至上主義的傾向を持つ人物へと形作っていく。播磨が恋愛を第一に考えていることは先述のとおりだが、『皿屋舗辨疑録』では悪人を想起させる「旗本奴」という鍵を、綺堂は恋愛を絶対視する人物に仕立てるための鍵へと置き換えた。お菊は、故意に皿を割る行為そのものに、恋愛に生きる姿が

表れている。播磨への疑いは、身分違いの恋のために起こる悲劇である。自分は腰元という身で相手は主人、しかも播磨には伯母の眞弓から身分にふさわしい縁談を持ちかけられているのを知って疑念を抱いた。お菊にとってこの恋は、未だ主従関係の中にある。そこで、十太夫から「万一誤つて其の一枚でも打砕いたら厳しいお仕置、先づ命は無いものと覚悟せい」と言われても、皿を割って命をかけて播磨の心を試すお菊もやはり恋愛に生きる人である。そして、「此上は何のやうな御仕置を受けませうとも、思ひ残すことはござりませぬ。女が一生に一度の男。（播磨の顔を見る。）恋に偽りの無かつたことを、確かにそれを見極めましたら、死んでも本望でござりまする」と播磨に斬られる姿には、これまでの皿屋敷譚で語られてきたような無念なお菊の姿はない。むしろ、「一生の恋も亡びた」無念さが斬った播磨に残された。皿屋敷譚に通底する皿を割った下女に対する因習的な断罪が、ここでは恋を疑った男女間の罪に転換している。

双方にとって命をかけた恋である。身分違いの恋だからこそ疑念が生まれ、それに苛まれ罪を犯したお菊は死なねばならぬ。「一生の恋」に生きる播磨が、その純愛を疑われれば、斬らねばならぬ。綺堂が付した「理屈」とは、皿を割るという行為が、すなわち真実の恋を割ることの意味づけ、またそれに至るための播磨とお菊が生きる時代を色濃く反映させた精神の構築といえる。

綺堂は、青山播磨のような武士としての自らの価値を見出せない「武士」を描き続けた。先にも触れた、一九二七年の『水野十郎左衛門』や三五年の『幡随長兵衛』に登場する水野十郎左衛門も播磨と同じく、天下泰平の世の中で喧嘩に明け暮れることで、武士としての存在意義を見出そうとする人物である。また、同じ題材を重ねて書いていることからも、綺堂が長兵衛と水野の逸話にとくに執着していたことが窺える。長兵衛を殺した後、水野が切腹するまでを描いた『水野十郎左衛門』は三幕物、幡随院長兵衛の一代記といえる『幡随長兵衛』は三部構成で、第一部と第二部が三幕ずつ、水野が登場する第三部にいたっては四幕あり、一つのテーマを扱った作品としては綺堂が書いた戯曲の中でも破格に長い。

これらで描かれる水野も町奴との喧嘩に明け暮れる。『幡随長兵衛』第三部で、水野はその心情を語る。

元和の大阪御陣以来、天下は太平、弓は袋に、太刀は鞘に、まことに目出たい世の中とは、誰も彼もが云ふことであるが、目出たくないのは我々武士の身の上だ。世がおだやかになるに連れて、なんとなく邪魔物あつかひにされる。（中略）また一方には、町人がめざましく繁昌する。その大名と町人のあひだに挟まつて、一番みぢめなのは御直参の旗本だ。右を見ても左を見ても景気のいゝ世の中に、不景気なのは旗本ばかりだ。御直参といふ名前ばかりは立派でも、借金は殖える、世間からは邪魔にされる。大きい声では云はれぬが、公儀ですらも此頃は、大勢の旗本を厄介物のやうに思つてゐられるらしい。

旗本武士の身の上をこのように語り、「つまりは自棄半分にあばれて

ゐるのだ。生れ付きおとなしい奴や意気地のない奴等は、唯ぼんやりと生きてゐられるかも知れないが、血の気の多い侍は、かうでもしなければ、生きてゐられないのだから仕方がない」と付け加える。では、播磨を含め、こうした境遇の旗本奴に綺堂がこだわったのはなぜか。それは綺堂自身の境遇とも重なるからではないか。岡本家は武士の家柄で、綺堂の父は佐幕派として彰義隊にも参加し、明治維新後は改名し英国公使館に勤めた。綺堂の『明治劇壇　ランプの下にて』（岡倉書房、一九三五）によれば、綺堂が就職を考えたとき、「時は恰も藩閥政府の全盛時代で、いはゆる賊軍の名を負つて滅亡した佐幕派の子弟は、たとひ官途をこゝろざしても容易に立身の見込みが無ささう」な境遇の中で、歌舞伎の狂言作者を志した。綺堂の父も「こんな事にでもしなければ我子を社会へ送り出すの道がないと考へた」から、狂言作者の道を了承したのだという。綺堂が歩んできたのもまた、士族の家柄であることに誇りを見出せない時代であった。綺堂が水野十郎左衛門や青山播磨のような旗本奴にこだわった理由はここにあるのではないか。『幡随長兵衛』の長兵衛とても同じと捉えてよい。長兵衛は、士分でありながら父が浪人のため武家に奉公し、そこで主人を守るため武士を殺して、のちに町人となった。町人になると旗本奴の横暴が目に余り町奴を組織して、旗本奴とやり合う事になる。そこには、武士に逆らえない町人の鬱屈した思いがある。水野にしても長兵衛にしても、それぞれが社会の日陰にいる。そして長兵衛は武士になれなかった士族でもある。綺堂は、水野や長兵衛、そして播磨のような人物を描きながら、自らの境遇を投影したのだろう。

四　『番町皿屋敷』と『二つの心』の関係

『番町皿屋敷』が初演時にどのように受け止められたか。一九一六（大正五）年二月に初めて上演されたとき、同時代の劇評家たちは、この作品が持つ類似性を指摘している。以下にそれらを並べる。

・中内蝶二「二月の本郷座」（『萬朝報』二月一一日夕刊）
男が女を飽くまで愛しながらも、強い武士気質の為に女を斬る処は『二つの心』に似てゐた。

・朗「本郷座の二番目」（『時事新報』二月一二日）
武士の意地で女を斬り棄てるといふ筋、どうやら先頃の『二つの心』に似たところもある

・凡鳥「本郷座―左團次、延若、芝雀―」（『國民新聞』二月一四日）
『二つの心』めくのがチヨツト気になりました

（傍線は引用者）

現代の我々のなかで『番町皿屋敷』を観て、もしくは読んで、『二つの心』という作品を思い浮かべる人がどれほどいるだろう。これは、同時代人だからこその指摘といってよいのかも知れない。その後に、『番町皿屋敷』と『二つの心』との類似性に言及するものは見当たらない。『二つの心』は武者小路実篤の戯曲である。一九一二（大正元）年一一月に『白樺』に発表され、初演は『番町皿屋敷』に近く、一九一五年一一月のことである。喜多村緑郎、川上貞奴らによって新

富座で一一月二九日から上演された。[9]『番町皿屋敷』初演と二ヶ月ほどしか隔たりがなく、劇評家たちの記憶に新しいわけだ。

この『二つの心』の中心人物は、「殿様」と「腰元」で、名前はない。殿様は先頃妻を亡くしている。妻が病気で苦しんでいるとき、殿様は腰元に言い寄った。腰元は殿様を蔑み、その当てつけに「近習」とよい仲になっている。屋敷の空き地に用意された磔刑台の上で腰元は語る。殿様に殺されるのを覚悟で近習に近づいたこと、そして早く自分を殺せと。しかし殿様は、お前が私を愛しているのを知っていると述べ、自分と生きてくれと頼む。また、真心を見せてくれれば、お前が望むように殺してやると言う。腰元はそれを聞き、殿様を一目見たときから慕っていたと打ち明け、奥様が病気になると、奥様の死を望んだと吐露する。だが奥様が病気で苦しむ姿を見て、神様に心を入れ替えると誓った。そんな折、殿様が言い寄ってきた。死んだ奥様へのお詫びに、せめて殿様に憎まれて死のうと決心した。腰元はそう語り、改めて殺してくれと頼む。躊躇する殿様に腰元は元の傲慢な態度で罵ると、殿様は「お前の思ひは叶へてやる」と首を切り落とす。最後に殿様は「あはゝお前の望みは叶へてやつた。俺はお前のことを思ひだす度に強くなるだらう。それにしてもお前はあまり弱かつた。（首を手にとり見つめながら）美しい顔だ、又とない清い顔だ」とつぶやく。

武者小路は、『武者小路実篤全集』第一四巻（新潮社、一九五五）の「後書き」で、「かいた時は一寸得意だつたが、今時の人には同感されにくいものと思ふ。乃木大将の殉死にある強い感じを受けたのが、之をかく一つのヒントになつたと自分では思つてゐるが、乃木大将の死に自分は厚意を持つて居たわけではないが、生きるよりも死を撰びたい人の気持を感じたのだ」と述べる。つまり、この芝居で奥様への義理を立てて死ぬ腰元は、乃木希典の殉死に着想を得た。筋を追うと、殿様が意地で腰元を殺す最後は『番町皿屋敷』と共通するのかもしれない。しかしそれは、表層に過ぎないだろう。

紅野敏郎は、「「白樺」論争―「二つの心」上演をめぐって―」（『國文學　解釈と鑑賞』一九七〇・六）において、「従来、まつたくふれられていなかつた秋田雨雀と武者小路実篤との「二つの心」上演に関する応酬にのみ限つて」、新聞記事や雨雀の日記を整理した。本論では、それに基づいて、新たに『二つの心』論争と『番町皿屋敷』との関連に踏み込んで論じてみたい。

この論争は、雨雀が『時事新報』に「武者小路氏作『二つの心』の上演」という批評文を発表したことに端を発する。紅野は、「秋田雨雀が「時事新報」（大正四年十二月七日、十一日）誌上において、「武者小路氏の[ママ]『二つの心』の上演」という一文を書いた」としているがこれは誤りで、雨雀は一九一五（大正四）年一二月七日、一一日、一三日の三回にわたり書いた。ただし、同じ『時事新報』の一二月一七日に掲載された武者小路の返答、「秋田雨雀君に」の末尾には「（十一日）」と日付が入っており、武者小路が冒頭で「君の『二つの心』についての批評はまだ終つてゐませんが」と言うように、雨雀の一三日掲載の文章を読む前に反論を試みた。なお、雨雀の一三日の記事は、

この戯曲に対してというよりも、舞台装置や役者への批判を主に書いている。[10] その後、一二月二六日の『読売新聞』で雨雀が「武者小路君に（『二つの心』に就いて）」で武者小路の文章へ返答している。

雨雀は「武者小路氏作『二つの心』の上演」で、次のように語る。

侍女の心には『生活』に対する心が少しも目醒めてゐない。若い『愛』と『生活』に対する執着の心が芽を持ちながら、全く生活に不用な感情のために壓せられて『死』を願つてゐる。この戯曲が舞台の上に展開されて行く間に最も強く感じたことはこの事であつた。（中略）『二つの心』の侍女の心には所謂『すね者』の心しか入つてゐない。（中略）たゞ口癖のやうに、

『私は死にたうございます！　早く殺してくださいまし！』

と叫んでゐる。『何のために？』『何ういふ必要があつて？』女は何等の理由なしにたゞ『死』を求めてゐるやうにも思はれる。またもう一つの疑問は男の女を真実に殺す時の心理状態が不明であることだ。（中略）この芝居では主人公の意思は全く不明のまゝでカーテンが下されてしまふ。

（一二月一一日）

雨雀が批判するのは、殿様と腰元のそれぞれの動機が明確でない点である。なぜ腰元は死を選び、なぜ殿様は腰元を斬ったのかが解らないという。これに対して、武者小路は「秋田雨雀君に」で返答する。

腰元が死ぬのはたゞ奥様の亡霊にたいする責任です。腰元が生きやうかと思つた瞬間に腰元の心には奥様の影が浮んだのです。昔だと幽霊でも出す処です。今時の人は幽霊を出す必要を感じないと思つたのは私の買ひかぶりかも知れません。（中略）

私はあの脚本で何をかゝうとしたかと云へば簡単です。自由な殿様が不自由な腰元を助けやうとして助けることの出来なかつた悲しみ淋しさをかゝうとしたのです。

武者小路は「亡霊」に苛まれる「不自由な腰元」を、殿様が自らとともに生きさせることで、その不自由から解放しようとし叶わなかった物語を書いた。「亡霊」とは奥様への義理であり、『二つの心』は義理のために死ぬ者を描いた作品といえる。

綺堂は、この応酬を認識していたとみて差し支えない。というのも、綺堂は同じ『時事新報』で、『鳥籠』という長編小説をこの時に連載していたからである。演劇に携わる綺堂が、これらの文章を見過ごすとは考えにくい。そして綺堂が「『皿屋敷』のこと」で、「何うかして殺す方にも殺される方にも相当の理屈があつて、何方にも同情を惹き得るやうに書いて見たいと思ひ立つた」ことは、まさに雨雀が指摘した登場人物たちの「意思」の明確化を意識したものといえる。なぜ腰元は殺されねばならないか、殿様は腰元を斬らねばならないか。雨雀はこの点が観客に伝わらないことが問題だと語った。綺堂がそれにこだわって執筆したのは、『二つの心』論争に影響されたからである。

しかし、『二つの心』は『番町皿屋敷』と異質な主題を持った戯曲といえる。ただしどちらも義理を問題とする点では共通している。綺堂のそれは、播磨の義理をお菊が疑うことで起こる悲劇である。しか

し、『二つの心』で殿様が腰元を斬る理由として挙げられた「不自由な腰元」という位置づけは、お菊には当てはまらない。播磨は、お菊の不自由さを助けようとして失敗したわけではない。家宝の皿を割ってまで心を試される播磨にとって、お菊を斬ることは、自分への不義理を犯したことを無念に思い、その罪を裁くことだった。またそれは、播磨が「若し偽りの恋であつたら、播磨もそちを殺しはせぬ」と語ることから、この恋が真実だったことの証しでもあった。そして、『二つの心』では、腰元は自らの願望を捨てて、奥様への義理のために死を望み殺される。しかし、お菊は命を賭して播磨を試し、その恋を貫徹して死んでいく。お菊は本懐を偽って死ぬのではない。つまり、武者小路は義理のために死を選ぶ者を、綺堂は義理に対する猜疑心によって死ぬ者を描いたのであり、それぞれ義理を扱いながらも主題は異なる。そして、主題からもたらされる結末は、両作品を決定的に分かつ。『番町皿屋敷』の播磨は、「一生の恋」を失い、自暴自棄のうちに喧嘩に身を投じ、破滅的な未来を示唆して終わる。一方で『二つの心』の殿様は、「俺はお前のことを思ひだす度に強くなるだらう」と、腰元の死を自らの糧として生きていくことを示す。両者は、人生における恋の比重があまりにも違う。播磨の恋は人生そのものといってよいが、殿様の恋は飽くまで人生の一部に過ぎない。この違いは、『番町皿屋敷』と『二つの心』の類似性を考える上で、決して小さくない。

劇評家が指摘するように、『二つの心』と『番町皿屋敷』にはその設定で似通ったものがあるのは確かだ。殿様と腰元という関係、腰元が裁かれる場所は屋敷の中、二人は相思相愛であり、最後は殿様が腰元を斬り殺す。『番町皿屋敷』との類似点を挙げると、『二つの心』への新たな見方が可能となってくる。つまり、『番町皿屋敷』が『二つの心』に似ていると捉えるよりも、これは『二つの心』と皿屋敷譚との類似性をみるべきではないか。身分や場所などが皿屋敷譚と共通で、『二つの心』では後半の腰元の吐露で相思相愛とわかるが、それまでは殿様が一方的に腰元に言い寄ったように見せる。こうした一方的な好意は、皿屋敷譚でも散見されることから、それらの共通点は『二つの心』と皿屋敷譚の間にある類似性ということになる。また論争で、武者小路は「奥様の亡霊」や「幽霊」という語を使う。つまり武者小路は、皿屋敷の世界に仮託して『二つの心』を執筆したと考えられる。おそらく、綺堂もそう感じたのだろう。そして論争に影響され、『二つの心』と同じ皿屋敷譚を脚色し、「理屈」にこだわって『番町皿屋敷』を書いた。『番町皿屋敷』の執筆に、『二つの心』および武者小路と雨雀の論争が大きく関わっていたと見なしてもよいだろう。

五　おわりに

この論争から、先述の紅野敏郎は『二つの心』を次のように評する。

「二つの心」が名実ともにみごとな一幕ものとはいささかいいかねる。「殿様」や「腰元」の出てくる一種の歴史ものではあるが、いわゆる歴史意識なるものがあつて作り出されたものではない。一定のきびしい歴史的条件のなかで人物が生き死にするのではな

い。「殿様」である必然性も「腰元」である必然性もない。ただ武者小路その人のなま身の思想が「殿様」のかたちを借り、「腰元」のかたちを借りて打ち出されているだけである。写実のドラマではなくて、観念のドラマなのである。

この言葉をそのまま『番町皿屋敷』に照らし合わせれば、『番町皿屋敷』も、階級闘争を伴うような「いわゆる歴史意識」を問題とするものではない。綺堂は、播磨とお菊の主従を越えようとする恋愛関係から、「必然性」を含んで生まれる私的な悲劇を展開させた。そして『番町皿屋敷』も、綺堂の鬱屈した思いを投影した「観念のドラマ」であることは先述のとおりである。しかしその観念に、太平の世に生きる旗本奴という、周到な「歴史的条件」を付したことで、「必然性」に乏しい『二つの心』とは明らかな違いを見出せる。『番町皿屋敷』には、「殺す方にも殺される方にも相当の理屈」があるからだ。そして、その「理屈」が武家社会の因習的で不合理な理屈ではなく、人間本来の感情に由来する理屈だからこそ、『番町皿屋敷』は多くの皿屋敷譚の中でも、今日もなお十分に鑑賞に堪えうるのである。

注(1)　伊藤篤の『日本の皿屋敷伝説』によれば、以下のような内容である。孕石家の当主政之進は、奉公人のお菊と相思相愛の仲だったが、政之進には許嫁がいた。お菊は政之進の愛を疑い、孕石家家宝の皿を一枚割ってその心を試す。疑われたことを知った政之進は激怒し、残りの皿を割ってお菊も斬り殺したと伝わる。伊藤は綺堂の「『番町皿屋敷』のプロットに共通する」と述べている。

(2)　『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一）によると、旗本奴の頭目とされる水野十郎左衛門が、対立する町奴の頭目であった幡随院長兵衛を明暦三年に殺害したとされる。のちに、水野十郎左衛門は不行跡により評定所へ呼び出されるが、そのときの態度が不敬の罪とされ切腹。二人の対立は歌舞伎、講談、実録本などで伝えられ、長兵衛は男伊達の典型として人気を博した。

(3)　越智は、『久夢日記』に「幡随院長兵衛が水野十郎左衛門に殺害される直接の契機となった芝居小屋の事件のおり、上演されていた芝居について次の記述がある」として、皿屋敷伝説でいうところの青山某とお菊に対応する、大久保彦六が下女の藤という娘に恋慕する部分を引用している。しかし厳密にいえば、『久夢日記』では、芝居小屋の場面以前に、水野十郎左衛門と懇意の大久保彦六と下女藤の皿屋敷譚が描かれている。つまり、越智がいうような幡随院長兵衛の話に皿屋敷伝説が挿入されているのではなく、独立した皿屋敷伝説と長兵衛の話を、水野十郎左衛門を媒介につなぎ合わせた形式となっている。

(4)　『近世風俗見聞集　第一』国書刊行会、一九一二年

(5)　「水野十郎左衛門」（『歌舞伎』宝文館、一九二七年六月）

(6)　「第三部　幡随長兵衛」（『舞臺』舞臺社、一九三五年一二月）

(7)　『近世實録全書』第一巻、早稲田大学出版部、一九二九年

(8)　『岡本綺堂読物選集　2』青蛙房、一九六九年

(9)　上演時の題名は「二の心」である。演劇界の慣習に倣って、題名の字数を陽数に改めたと思われる。

(10)　一九一六年一月の『演藝画報』に掲載された川尻清潭の「楽屋風呂」によれば、『二つの心』は「有島生馬氏舞台意匠、山本有三氏舞台監督」とされる。雨雀は「意匠をした人の考へが色々に変形されたとは聞いてゐたが、あの舞台装置は決して『二つの心』を飾るべきものではなかつた」と批判している。

※引用に際して、ルビは原則省略し、適宜旧字は現行の字体に改めた。